

〈書評論文〉

グローバル・シンデレラ

—— 台湾における移住家事労働者と新興富裕層の雇用主 ——

Pei-Chia Lan,
*Global Cinderellas:
 Migrant Domestics and Newly Rich Employers in Taiwan*
 (Duke University Press, 2006)

黒田麻耶

1 本書の概要

本書では家庭内で家政婦やケア労働者として働く女性移住労働者とその雇用主に焦点を当て、私的領域である家庭内でどのようにグローバルな不平等が作用しているかを明らかにする。

1960年代以降、欧米では女性の社会進出が進むのに伴い、アジアやアフリカからの移住労働者が家庭内労働を受け持つようになった。アジアにおいても女性の社会進出が進んだ現代では家庭内労働のための移住労働は増加している。こうした労働の担い手は主にフィリピンやインドネシアといった、東南アジア出身の人々である。

台湾は近年経済発展や女性の社会進出が著しく、移住労働者の受け入れにより移住者と現地住民の階層化、および移住者内部の階層化が進んでいる。著者はこのような現状にある台湾をフィールドとし、台湾で働く移住家事労働者、またその雇用主である高所得台湾人女性を対象としてインタビュー調査を行い、移住労働市場におけるジェンダーや経済的地位、学歴、人種や民族などの観点から、労働者と雇用主の相互作用を探る。とりわけ家事移住者がジェンダーや人種・民族の階層化にどのように影響を及ぼすのかについて、世界規模のマクロな視点と家庭内のミクロな視点の両方から明らかにしていく。また移住労

働者の女性化が指摘されているが、ジェンダーと移住労働がどのように関わっているのか、著者は実証的な研究をもとに考察している。

日本でも女性の社会進出が唱えられる一方、女性に期待される家庭内での役割は依然として大きい。同時に外国人労働者の受け入れが看護や介護の分野で部分的に始まり、今後受け入れが家事労働にまで広まれば日本での外国人家事労働者の需要も高まると予想され、既に先行してこのような現象が起こっている台湾での事例を検討することは重要である。

著者である Lan Pei-Chia はジェンダー、労働、移住労働を専門とし、国立台湾大学で社会学の教授職に就いている。本著はその緻密な質的調査と理論構築ゆえに、2007 年にアメリカ社会学会 Sex and Gender 部門および ICAS (International Convention of Asia Scholars) 社会科学分野において最優秀作品として表彰された。

本書の構成は以下のとおりである。第 1 章で移住労働政策や制度が移住労働に及ぼした影響を示し、第 2 章でそうした政策がもたらす階層化について検討する。第 3 章から第 5 章までは移住家事労働者が家庭内での性役割にどのような影響を与えるかについて検討を行い、第 6 章で雇用主と家事労働者の相互作用においてどのように社会的差異が再生産されるのかについて明らかにする。

2 移住家事労働者の背景にある国際移動システム

第 1 章では移住労働力の輸出入に国家の法規や制度的メカニズムがどのように作用しているかについて検討される。1980 年代から 1990 年代にかけて急速な産業化が進んだ台湾では、アジア各国から移住労働者が流入した。この国際移動には政府からの介入や仲介業者による商業化、受け入れに関する厳格な規則が特徴としてみられた。

まず移住労働者の受け入れに対して政府が直接的に関与した理由に、労働力の不足、中でも 3D といわれる「汚い・危険な・やっかいな (dirty, dangerous, difficult)」仕事を担う安価な労働力の不足がある。国内の賃金上昇や、中国や東南アジアとの競争により 1980 年代半ばに競争力を失った台湾の産業を再興させるため、低賃金労働者が必要となった。こうした仕事を安価で引き受ける移住労働者は需要が高く、中でも経済発展期に女性の賃金上昇に伴い共働き家庭が多数となったことで、家事労働者の需要は急激に高まった。また台湾でも核家族が増加しているため、幼い子どもや老人へのケアを担う人手の必要性が深刻な課題となっていることも、家事移住労働者の必要性を高めた。

台湾の移住政策は、民族の近い中国本土の労働力ではなく、他人種だということが明ら

かに分かる東南アジア人を受け入れることによって、他民族を監視し従属的な立場に置いていることが特徴的である。また外国人労働者受け入れを外交に利用する政策をとっていること、移住労働者の内部でも専門職と単純労働による移住労働者の階層化が生じていることも特徴といえる。

また、アジアの労働移住においては仲介業者による紹介が重要な役割を果たしている。移住労働者は仲介業者に対して仲介料として多額の借金を背負っている。この返済の必要性のために、彼らは契約を途中で放棄することはできない。

受け入れ国による厳しい規則に関しては、法的には移住労働者は諸権利を持つとされるが、それらを保障する政策は打ち出していない。移住労働者の保護法は形だけのものにすぎず、労働環境の監督や効果的な法的援助もなされず、彼らは借金のために異議を申し立てることもできない。移住労働者の逃亡を防ぐために雇用主は強制的に移住者の金を預かり監視下に置く。このような方法は搾取や服従関係を強めている。

様々なネットワークや仲介業者によって、国境を越えた人の出入りが推し進められている一方で、国家の壁は厚くなっている側面もある。

3 外国人蔑視と他者の階層化

国際移動のシステムの中で外国人労働者は従属的地位に置かれることが明らかとなった。次に第2章では台湾人が移住者を階層づけ、また移住者が付与された階層を再定義するメカニズムが検討される。

台湾における家事移住者は、汚い仕事に就く外国人として蔑視される。公的な文書でも用いられる「外労」という言葉は「東南アジアから来た3Dの職に就く人」という意味を持ち、「東南アジアの人々は元来こうした仕事に適した人だ」との認識につながる。著者によれば、民族主義は身体的・文化的特徴といった要因に基づきなされるものだと考えられてきたが、台湾ではそうした特徴のみでなく地位や職種もまた人をカテゴリ分けする要素となる。ここで著者は「階層づけられた他者化 (stratified otherization)」という概念を提唱し、人種の境界に存在する関係性の構造の重要性を強調する。前章では外国人を下位に置くような制度について述べてきたが本章では人種主義について、とりわけ「外国人」という一般的なカテゴリの中でも、より下層におかれる「外労」という表現についてみていく。また、雇用主の好みに合わせて労働者の国籍の違いにより移住労働者間に競争関係を生み出すような、新規雇用や訓練を行う組織によって作り出される人種イメージについても言及する。

台湾には「山人」や「蕃」といった先住民がおり、人種差別は決して新しいことではない。

台湾人の多くは中国からの移住者である漢民族で、ポリネシア系の民族的特徴を持った先住民も約1.6%居住している。ここ数十年の産業化に伴い中国系移住者が増加し都市を占拠した一方、先住民はハイリスクな建設業に就くという階層差があった。しかし中国本土への帰属をめぐる問題が取りざたされる中で、台湾政府は国民的連帯感を高めるために「台湾本土に居住する人々」を先住民も含み「新台湾人」とまとめて呼称するようにする。先住民はすでに「同化」し「我々」のうちであるのに対して、1990年代に外国人移住労働者や結婚移民として流入してきた新しい移住者たちは「野蛮な」他者であり差別対象となった。

移住労働が初めて合法化された際、多くの批判が起こった。特に問題とされたのが衛生問題であり、移住労働者たちの衛生観の貧しさが彼らをモラルの低い人のように思わせた。犯罪率の上昇や労働倫理の欠如も懸念され、特に女性は性的な倫理観が低いという視線にさらされていた。こうした不安感から雇用主たちは、彼らに衛生的にも道徳的にも清潔であってほしいと考え、政府もまた全ての移住労働者の監視を行うこととなる。

現代の台湾では同じ移住者であっても、その内部に差異が存在する。欧米や日本から来たホワイトカラー層は「外地人士」と呼ぶのに対し、ブルーカラー層に対しては「外労」という呼び方をする。前者が人間としてのアイデンティティを付与されているのに対し、後者には労働という観点のみで評価されるという。外労はそれぞれの民族に対する偏見に基づきさらに下位カテゴリに分けられる。著者は仲介業者が集団を超えた民族国家的偏見を作り上げ、移住家事労働者を階層化したのだという。

仲介業者たちは雇用主の代わりに外国で人材を集める。逃亡しないように保証人を立て、実践的な訓練のみならず倫理観や語学など多岐に渡る訓練を受けさせ、従順さを叩きこんだうえで雇用主に紹介する。彼らは国籍ごとに異なる方法で「労働力商品」を売買するが、これには業務上の理由がある。台湾政府は移民政策を外交の手段としているため、国の規則の変化に対応するような、経済的リスクを最小化できる「生産ライン」を国籍ごとに整備する。このような新規採用・訓練・紹介というプロセスの中で彼らは民族イメージを作っていく。

ここでは主な送り出し国であるフィリピンとインドネシアを対象に、二国間の教育と言語資本の違いに着目する。また二国間の人種に基づく差異を拡大するような仲介業者の売買の考え方や新規採用戦略にも焦点を当てている。

フィリピン人移住労働者とインドネシア人移住労働者を比較すると、前者の方が明らかに教育水準が高い。フィリピン人移住労働者は大卒がほとんどの一方でインドネシア人は中卒・高卒がふつうである。フィリピン人は高い教育水準だけでなく、公教育により英語が堪能であることも武器である。台湾では社会的地位の上昇のためにも教育、とりわけ英

語の重要度が高まっており、そのような中で高等教育を受け英語が話せるフィリピン人メイドは有利となる。時には家事労働を超えて通訳や英語教育を行う場合もあるという。

仲介業者は人種的な境界を設け、フィリピン人移住労働者とインドネシア人移住労働者はお互いに敵対心を植えつけられ、その溝は言語の障壁によって一層深まる。インドネシア人がもつ「従順」というイメージも、英語が得意で教育水準の高いフィリピン人と競争させるために業者が付与したものに過ぎず、競争心から彼らは期待された通りにふるまうのだという。

本章では移住家事労働者が台湾人や他民族の人との関係の中で、民族イメージに基づき自らを「階層づけられた他者」としていく過程、移住女性を従属的な外国人メイドとする流れを追った。過去の人種的な他者が「新台湾人」として取り込まれた一方で、新しい民族的他者は人種に基づいた集団で構築され、国籍で分離させられる過程に現在あるという。

4 女性性の階層化

メイドと妻の行う仕事にはほとんど差がない。移住者は社会の全体的な階層だけでなく、女性性の階層化にも影響を及ぼしており、第3章では家事労働者の雇用が家族関係やジェンダー・アイデンティティにどのように影響を与えるのかを明らかにしていく。そのために以下の問いを設定する。「民族性や女性性の優位を維持するために、どのようにメイドとの境界線を引くのか」。「似たような役割を担う別の女性が同じ家にいるとき、どのように混乱を避けるのか」。これは妻とメイドだけの問題ではなく、他の家族成員も含む問題であり、台湾の家庭や慣習なども含めて議論を提起する。

妻・母・嫁といういくつかの異なる役割をもち、その中で助けを必要とする女性は、どのように家父長制と折り合いをつけるのか。台湾ではいかに仕事で成功しようとして、家事をしない女性は社会から認められない。家事は「女性の労働」だという責任から妻たちは逃れられず、自らが責任を果たしていない不安感からメイドに厳しく当たる。また高学歴で着飾っていない妻よりも、かいがいしく世話をしてくれるメイドを、夫や子供たちは好むのではないかと恐れてもいる。

台湾女性は性別に基づく義務としての母・妻・嫁役割を、移住女性を雇うことで再編しようとしている。例えばメイドに夕食の買い出し、洗濯やオムツの取り換えといった単純作業をさせ、その間母親は子どもとの時間を過ごし、手の込んだ料理をつくるなど、家庭内の情緒面を受け持とうとする。母親にとって家事労働においては女性性の承認が問題であり、自らの立場を得るために仕事の内容に格差を設けることで境界を作っているといえる。

5 越境とジェンダー分離

では移住労働の当事者達は国境を越えることで、性役割の境界にどのような影響があるのか。フィリピンやインドネシアには性別役割分業が色濃く残っており、結婚生活に自由が少ない。国際移動により、家族レベルでは無償であったはずの労働が、国際的な空間では休暇も与えられる賃金労働となるため、移住家事労働者として働くことはしばしば合理的選択であり、母国に帰ることを嫌がりさえする。国境や性役割の境界を越えることで、移住女性は独立と解放を手に入れた。しかし母役割を放棄したという倫理的な罪の意識が残る。

移住女性が他人の子供の世話をしている時、誰が彼女の子供の世話をするのか。多くは親戚の女性であり、仕事をやめた夫がすることもある。彼女たちは子供のために必死で働き、贈りものをしたりすることで母役割を達成しようとするが、しばしば母は子供の人生の節目を祝うことができず、浮気を疑われることさえある。

移住女性たちは「賃金を獲得するために子供を置いて働く女性」という点で、雇用主の夫人と自分は似ていると考える。そこにはただ海外に出ているかどうかという違いがあるにすぎない。前章で雇用主の女性は妻・母として構造的にメイドと対立した位置にいと述べたが、メイドは夫人と自分は立場を共有していると感じ、曖昧で柔軟な境界を設けている。

また海外での生活を経験した独身の移住女性は貧しい母国に帰りたがらず、自国の女性相手では男性性を発揮できない先進国男性は従順な移住女性と結婚したがらる。ここには彼らはメイドとして雇うと賃金が発生する家事労働を、無報酬で担わせようとする意図がある。これは移住女性にとって不利益なことではあるが、結婚することでメイドというステイグマから逃れて社会的承認を得ようとすることもある。

女性雇用主が妻とメイドの立場の違いを厳格に区別しようとする一方で、メイドにとっては無報酬の家事と賃金のある家事労働との境界は曖昧なものとなりつつある。住み込みの家事労働者を雇うことは、公私の境界を曖昧にし、家事労働における有償と無償の境界もまた曖昧なものとしている。

6 表舞台と裏舞台の境界

第5章では移住女性たちがどのように様々な空間において海外生活を経験しているかを明らかにする。著者は相互作用論に基づく「表舞台」と「裏舞台」という概念を用い、彼

女たちの日常生活を理論化していく。

雇用主たちは家事労働者が逃げ出すのを恐れている。そのため規則を設け、監視を行っており、こうした自由の制限は労働者の労働を超えプライベートにまで及ぶ。家庭内での居住空間は雇用主と分けられ、他の移住労働者との交流も制限される。こうした空間的な監視によって、家庭内での家事移住者の地位の下位性は補強される。

家事労働者がシンデレラと最も似ているところは、平日と休日での表裏に大きな違いがあるところだ。雇用主の監視下では彼らに不安を与えないために「良い子」で過ごす、週末には家事移住者同士で集まることもある。メイドという役割から離れ、普段の質素な服装からおしゃれな服装へと着替え、うわさ話や家族の秘密、悪口などを打ち明けあう。

携帯電話の普及は家事移住者を地理的な不満から解放してきた。表舞台と裏舞台を行き来する移住者の生活世界を広げ、プライバシーを得ることを可能にした。それだけでなく携帯電話を持つことで、自らの消費者としての力を見せることもでき、母国に最新機種を送る人も多い。また携帯電話を持つことで遠く離れた家族と親密性を保ち、外国にいる人と恋愛関係を育むなど、空間に関わり無く他者とつながることが可能になった。

国境を超えた社会的空間においても表裏がある。彼女たちは母国では表向きに「海外で働く英雄」としてふるまっているが、実際には裏で過酷な労働をしている。彼女たちはたくさん稼いでいると思われるために多額の寄付をしたり、頻繁に豪華な贈り物をしたりするなど誇示的消費を行う傾向が強く見られる。発展途上にある自国の経済に寄与することが彼女たちにとってのステータスであり、家族の要求を満たしお金を分け与えることが満足に結びつく。

表舞台と裏舞台でふるまいを変える彼女たちであるが、そこには明確な境界線が存在しているのではなく、ゆらぎがあることにも注意をする必要がある。

7 主人と召使

雇用主と家事労働者は、日常生活の相互作用において社会的差異にいかに対処するのか。白人雇用主の研究では、富裕層では雇用主と労働者の社会的地位の差は明らかであるため親密になっても関係の混同はされないが、中間層では相対的に地位の差は明白でないため距離が必要となり、その葛藤を解決するために戦略的にビジネスライクな個人主義をとるという。しかし労働者自身は親密な関係を望むことが多く、対等な個人として雇用主との関係を結びたいと考えており、両者の考え方には大きな違いがある。

雇用主と労働者はお互いに相手に対しての接し方に異なる戦略を取る。雇用主たちは「ど

の程度移住者たちを家族から疎外するか」、「どの程度階層差を強調するか」の二つの軸で労働者との境界をどのように設定するかを決める。その一方で家事移住者たちは、雇用主との間の階級差・民族差という隔たりを受け入れるために、階級・民族境界と社会的空間境界という二つの軸を用いて境界を再構成する。

著者は雇用主と労働者による境界の再構成を描いたが、どの戦略が最も優れているのかということは、雇用主と労働者との間の相互関係に依存するものであるため定義することはできない。しかしこの相互関係において優位な立場にあるのは常に雇用主であり、そのため労働者は従属的な立場を取り続けることが戦略的には有効だという。世界的な文脈に埋め込まれたアイデンティティ政治や階級闘争の縮図がここにあり、個人的なことは政治的なことに、家庭内のことも世界的なものとなっているといえる。

8 まとめ

以上みてきたとおり、世界規模でみられるジェンダー格差や民族格差は、近代化が進み女性の職場進出が進むことで移住家事労働者が増加することにより、格差は逆に自身の手によって再定義され、より強固なものとなることが明らかとなった。階層化を止め、格差を広げないために十分な法制度の強化や、移住者たちの意識の強化がこれからは必要となるといえる。

はじめに述べたとおり日本でも女性の就労支援策の一つとして、外国人家事労働者の受け入れが推進されている。2014年の秋には試験的に関西圏での受け入れが始まり、今後範囲の拡大が予想される。台湾で観察された格差の再定義や女性性の階層化は、ヘイトスピーチのような人種差別が行われ、性別役割分業意識が依然として強い日本でも十分に予測されるため、本当の意味での女性の地位向上はこのままではなされないだろう。台湾でも見られた通り外国人労働者の受け入れは現地の人間との結婚が避けられず、本書では触れられていないが、移住者の数が相対的に少ない現状でも問題となっている移住二世の教育サポートは、非常に重要な問題だといえる。台湾の事例を検証することで、今後日本での受け入れが推進されることで生じる階層化などのリスクを改めて見直すことが現在早急に必要とされることではないだろうか。

(くろだ まや・修士課程)